在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校　（Bandung Japanese School）

太陽の子

「太陽の子・バンドンの子」
～明るい心・頑張る力～

令和8年度学校だより
11月
校長　宮邉淳一

自分らしさを創り出す「学び」の姿　～26名の「夢」と「志」が紡いだ70分～

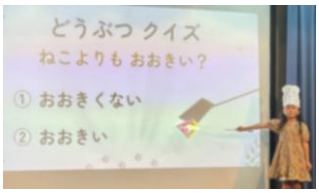
11月7日、「令和８年度学習発表会」を開催いたしました。「伝わった！を感じよう」「すごいね！を見つけよう」「力を合わせよう」のテーマのもと、幼稚部から中学部まで、全校園児・児童生徒がそれぞれの持ち場で全力を尽くした、極めて密度の高い70分間となりました。

２学期当初に掲げた「大冒険」という名の羅針盤は今、まさに「学びの充実期」の中で実を結びつつあります。私たちは日頃から子どもたちに「楽しさは、自分たちの手と工夫で創り出すもの」という想いを言葉にして伝えています。今回の発表会は、子どもたちが受け手ではなく、自ら楽しさを創りあげる「表現の当事者」へと見事に変容した大舞台でした。

○ 幼稚部：会場を包んだ「伝えるエネルギー」

くったくのない笑顔と、舞台の枠を飛び越えるような堂々とした演技。その場に応じてのびのびと対応できるエンターテインメントぶりは、観客席の大人たちの心を一瞬で解きほぐし、会場全体を最高に温かい空気で満たしてくれました。「伝える楽しさ」の原点が、ここに確かにありました。

○ 1・2年生：言葉の力と専門性への挑戦



言葉とセリフの明瞭さが一気に増し、確かな成長を感じました。自分たちで調べた「動物や地球のひみつ」を、単なる暗記ではなく、クイズや自らの感想を交えて生き生きと表現していました。大人が聞いても「はじめて知った」と驚くような専門的な視点が含まれており、知的好奇心の深まりが見える見事な発表でした。

また、プログラムの後半の幕開けを飾った、瑞々しい合唱。体いっぱいで響かせた「やまびこさん」の歌声には、純粋に声を合わせる心地よさと、表現する喜びがあふれていました。

○ 3・4年生：セリフを「自分ごと」にする感性

自然を守ることの大切さを、劇を通して分かりやすく伝える工夫が光りました。何より素晴らしかったのは、与えられたセリフの表面をなぞるのではなく、その言葉の意味を自分の頭で理解し、「これからの自分の生活にどう生かすか」という手応えに変えようとしていた点です。学びを実生活へと接続させる、しなやかな感性が息づいていました。

○ 5・6年生：事実から考えをつくりあげる姿と「組織の真価」

実際の調べ学習や活動をもとに自分たちの考えをつくりあげ、視聴者に「本気で伝えよう」とする姿勢が極めて秀逸でした。さらに特筆すべきは、全体進行という大役を担う中での臨機応変な力です。当日、急遽欠席となった友だちの持ち場に対し、子どもたちは動揺することなく即座にフォローへと動き出しました。全体進行や発表の役割を自発的に分担し、何事もなかったかのように全うしたその行動には、友を思う深い情愛と、強い協働体制が通常から機能していたことへの真価がはっきりと現れていました。

○中学部：「まだ見ぬ未来」へ目線を上げる志

多くのゲストから聞き、学び取った膨大な知見をもとに、自らの「将来の夢と志」を熱く語りました。どんなに素晴らしい話であっても、それを自分に置き換えて語る「自分ごと化」は非常に難しい作業です。だからこそ、小手先の技術ではなく、目線をぐっと上に引き上げ、まだ見ぬ未来に向けて自らの言葉で志を紡ぐ生徒たちの背中は、後輩たちの大きな憧れとなり、最高に輝いて見えました。

○ 全体進行を支えた高学年以上のリーダーシップ

今回の発表会がこれほどまでにスマートで温かい空間になったのは、舞台裏や進行席で汗を流した高学年・中学部の存在があります。ただ原稿を読むだけの司会進行ではなく、会場の空気を感じ取りながら、全体の流れを自分たちの手でコントロールしようとする凛とした姿がありました。彼らの確かなアナウンスと臨機応変な立ち回りが、全体の発表を一つの美しい流れへと昇華させていたのです。

○ 小学部3年～中学年部劇：合同インドネシア語劇「バンドン浦島物語」

発表会のクライマックスを鮮やかに彩ったのが、小学部３年生から中学部までが息を合わせた合同劇です。多言語でのセリフ回しや小道具の転換など、見えない舞台裏での汗も含め、「劇の幕が完全に閉まるその最後の瞬間まで、自分の役割を美しく全うしようとする頼もしい背中」がそこにはありました。

学習発表会後、自分の中の「もう一人の自分」と対話するふり返りを行いました。最高学年である中学部の生徒は、ノートにこのような言葉を残しています。単なる「楽しかった」というお祭り騒ぎの感想で終わらせず、自らの行動を客観的に捉え、変わった自分を見つめ、次なる日常へ接続させようとするこの「もう一人の自分」の存在を創ることこそが、BJSの「学び」の真髄です。

私の「夢」は「志」に
中学部二年　小中咲弥

「私はマンガ家になりたい」
一番大切なフレーズを、
はっきり、ゆっくり大きな声
で届けました。
学習発表会に向けたスライド作成を通し、今までぼんやりしていた自分の「夢」が、目標をもった「志」へと客観的に意識できるようになったのです。「つまらないかも」と思う瞬間にも、面白いところや利点を探せる自分へと変化し、前よりも自分からチャレンジすることも増えました。
本番のキャリア研究の発表では、お互いの顔を見ながら会話をするような温かい雰囲気を作り出すことができ、確かな手応えを感じています。
また、周囲のすごさを見つめる目も育ちました。当日、急遽メンバーがいない中で全体進行を全力でがんばりきった小学五・六年生の姿は、尊敬に値する素晴らしさでした。
学習発表会という大冒険で得た実感を大切に、日常の学びへ繋げていきたいです。

低学年部の振り返りの様子。
真剣に取り組んだからこそ、
振り返りの姿も輝く。

■ 準備段階から始まっていた「楽しさを創りあげる」プロセス

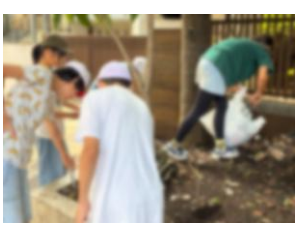
今回の学習発表会において、子どもたちが発揮した「創りあげる」力は、当日の舞台上だけのものではありません。会場に並んだ展示作品の「良さ見つけ」を丁寧に行い、自らの手で会場を設営したそのプロセスすべてが、創造の営みでした。

さらに胸を打たれたのは、小学部高学年や中学部の姿です。先の夏祭りの時のように「お客様をお迎えする」という高い視座から、自発的に学校の外周を清掃する姿がありました。

こうした見えない場所での丁寧な段取りと、相手を思う「心の準備」があったからこそ、当日の70分間は単なる発表を超え、全員の手で本物の楽しさを「創りあげる」確かな変容へと繋がったのだと考えます。

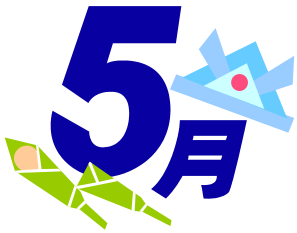
これからもこの温かい学びの共同体を、共に育ててまいりましょう。

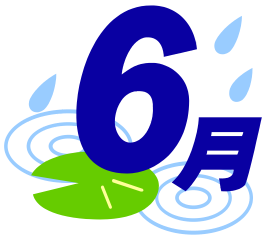
←展示作品の鑑賞。
よさを見つめて



→夏祭りに続く、
学校外の事前清掃。

4月


5月


6月

7月

8月

9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月